

巻頭言

波岡茂郎

畜産をとり巻く情勢は最近ひじょうに変化してきました。牛肉の国内需要の60%が輸入によって占められ、豚肉でさえも40%は輸入品です。最近農水省は食糧自給率2000年度の目標値を50%以下に見直しておりますが、民間での調査ではこれよりさらに下廻ると試算しております。一方、近頃のペットブームは目をみはるものがあり、ペット産業はエサを中心に年間2800億円という成長ぶりです。十数年前までは500億といわれておりましたが、畜産産業と比較して異常な姿です。

日本の豊かさは社会構造を変え、それに伴って新たな環境すなわちコンパニオンアニマルとの共存が普遍化し、老いて孤独な者の慰めとしてのペットの要求が強くなってきました。反面貿易の自由化によって日本の農業はきわめて苦しい立場を強いられております。果して、わが国の農産物(畜産物も含め)で、これだけはいかなる自由化の中でも生き残れるというものがあるでしょうか。

話は変わりますが、18世紀末に英国のマルサスが人口増と農業生産との相関について詳述し、このまま人口増が進めば何時かは農産物の需給が破綻するといっております。一方、20数年前にローマクラブは「成長の限界」というレポートを提出し、現在の人口増は幾何級数的で異常であり、これは人口爆発とも考えられ、このままでは来る21世紀末には食糧、エネルギーともに枯渇するであろうと警告しております。年間約1億人も人間が増えていくといってもピンとこなければ、毎年日本の人口と同じ位の国がひとつずつ出現していると

言いかえましょうか。来たるべき時に備えてわが国の農業基盤を強化しなければならないこの時期に、食糧の輸入攻勢を受け農水省も農業団体も将来像の青写真を的確に画き得ないらだちをもっています。一方、消費者のニーズも最近大きく変わってきました。「黒豚」と表示すれば少々値が張っても飛ぶように売れます。しかしわが国にそんなにパークシャーが飼育されているはずがありません。万事このようなことで、消費者は安い輸入畜産物を購入する一方で、国内における安全でかつ味覚に訴え、しかも飼育管理のすぐれている農場由来の生産物に強い関心を強めてきております。一方、その背景としてその生産物が種々の条件を満たす客観的な認定が必要となってきます。今回SPF協会が認定制度を発足したことはきわめて大きな意義を有し、このことが輸入畜産物との競争に打ち勝つ要因です。しかし今後のSPF生産の課題としてつぎのようなことが上げられましょう。

そのひとつは認定を受けたSPF豚のと場処理法と流通です。これによって消費者は末端で安心してSPF豚肉を選択購入することができます。いまひとつはSPF豚の血液更新です。SPF状態とともに常に肉質や母豚の能力を向上させる必要がありますが、個々の農場でそれぞれ血液更新を行い、全体としてコマーシャル種豚の価格を押し上げることは問題です。これについては協会に属する諸企業が協力して種豚の導入をはかり、少しでもより優良なGGP種豚の生産経費を削減すべきでしょう。